

食の根源——自然と人間の蝶番

1. 火の賜物 = 消化容易な栄養素 = 脳の発達 (リチャード・ランガム『火の賜物』NTT出版)
2. 食物 = 殺した生命 = 人間はフンコロガシやミミズのように「分解者」の仲間 (拙著『分解の哲学』青土社)
3. 内臓の派出器官としての台所 (拙著『ナチスのキッチン』共和国) 歯と包丁、大腸と発酵
4. 文化の根源 土壌、気象、植物、動物、人間の消化器官のチューブを通過する生きものたちの祝宴。地域によって料理や食材が異なる。

食の未来：三つの道

1. 食という「面倒なもの」の終焉 → 多収入層のレジャーとして的高级食。栄養確保だけの労働者層（手塚治虫『火の鳥』のディストピア：一級市民と二級市民の食事）
2. 食という「儲かるもの」の過剰な市場化 → 種子、栄養素、加工、販売、欲望まで御膳立てされる社会（バチガルピ『ねじまき少女』の世界）
3. 食という「楽しいもの」の復権 → 労働時間の短縮 → 料理時間の増加 → 「縁食」（家でも職場でもない場所で安価もしくは無料で食べる）の増加 → 小規模の食の場所については、上からの「安心・安全」設計よりも、信頼醸成を支える設計へ。

縁食の思想

生命と人間との「縁」（関係性の偶然的発露）を土台にした色のあり方を考える。縁には常に「漏れ」と「分解」が必要となる。

先駆者——多重な「弱目的性」

安藤昌益『**統道真伝**』（1752年頃）

江戸時代の秋田藩が生んだ稀有なエコロジカル民主主義者

「無上無下」「**無貴無賤**」「漏れ」「**直耕**」（土と内臓を耕す）

D. モントゴメリー+A. ビクレー『土と内臓』（原典＝2015年）

微生物の力による、土壌と内臓の活性化。中央集権ではない**分散**モデルである「植物」の知恵。

食現象の拡張的考察

⇒化学肥料と農薬による世界的な土壌劣化の危機。国際土壌年（2015）。大規模農業への警告。小規模農業の日本に追い風。が、国際連盟総会で決議された「**小農の権利宣言**」（2018）に日本は棄権。エネルギー源としての生ゴミ。

分解とは何か

* 「生産」と「消費」の強制から脱した「分解」の根っこワーク。食の脱領域的思想（藤原『分解の哲学』2019）。

* あるものから属性を洗いとって、別の属性の一要素にかえられるようにする現象への参加。* 「**死の饗宴**」への参加。

* モーターの高速回転に頼った燃料消費的運動ではなく、膨大な微生物の力を借りた分解運動を中心に据える。

* 分解しやすいものへの原料革命。

* 微生物の力を借りたエネルギー革命。

農薬、化学肥料、石油石炭を脱する

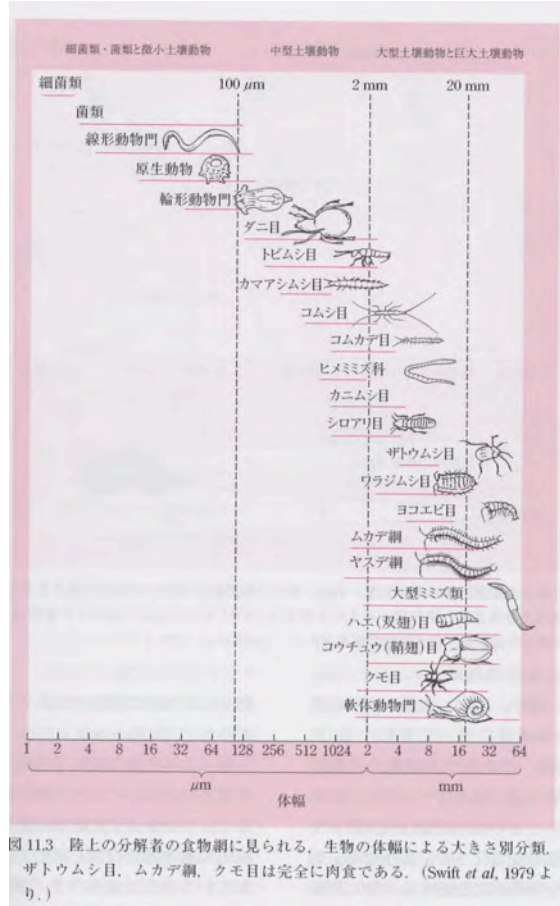


図 11.3 陸上の分解者の食物網に見られる、生物の体幅による大きき別分類。
ザトウムシ目、ムカデ綱、クモ目は完全に肉食である。(Swift *et al.*, 1979 より。)

M. Begon, J. L. Harper, C. R. Townsend 『生態学』

堀道雄監訳、京都大学学術出版会、2013、p.431.

忘れられてきた分解decomposeの問題

生態系の三要素
ecosystem[1935]



これらを「調和」と語るのは間違っている。徹底的な利己的行為の統率なき共存、数値に置き換えられない多様性の保存に過ぎない。

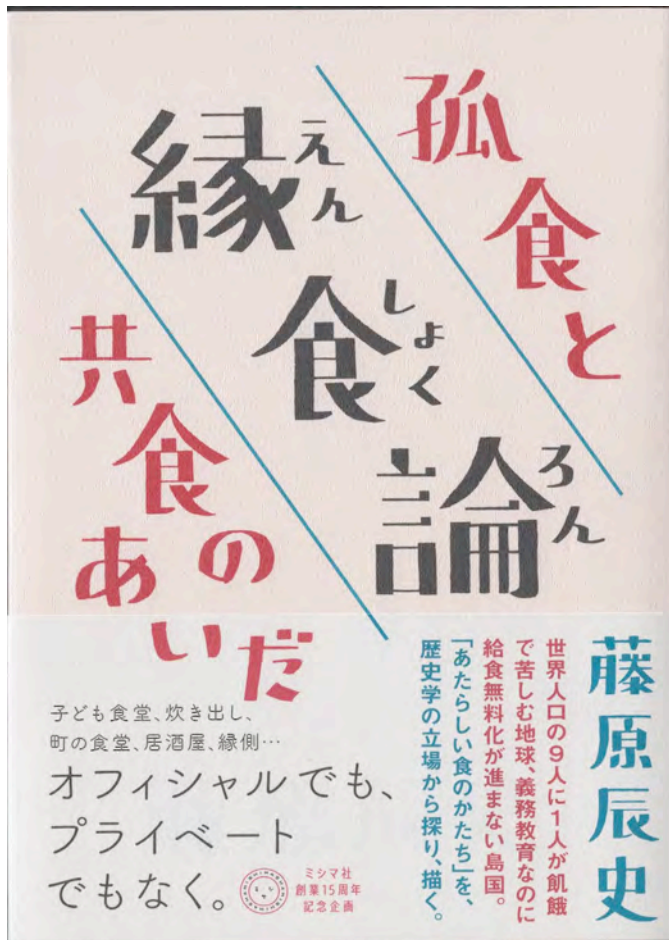
生産者 producer

物質循環 material circulation

消費者 consumer

分解者 decomposer





縁食の思想

* 家族以外の人たちと緩やかに食べる場所

* 新自由主義的ベーシックインカムや水道民営化への対抗。
ベーシックサービスの一つとしての「食べもの」

* あらゆる必需品（とくに食、住、水、空気）から商品の枠組みを外す運動。

* 人間関係をデザインしない。人間たちが居やすい「場所」だけを設計する。

* 子ども食堂と給食の発展

縁食の特徴

- 食を過剰な商品化から解放する
- 食は人の緊張を解く、副交感神経を働かせる
- 優しさが人に属さない
- 恩着せがましくなり
- 優しさやケアが発露しやすい
- 人の感情が一方向ではない
- 無償の贈与にならない
- 守らなければならないものの制度設計だけが重要
- 弱い目的が多数併存する、強い目的はない
- 世代横断型のつきあいができる
- 植物の地下レストランと、人間の腸内レストラン（漏れのイメージ）

全体のまとめ

1. 構造的暴力と感染症と食（ガザ地区の封鎖）
2. 雇用者と被雇用者の搾取の関係と、人間と自然の搾取の関係。思想問題として本来同根ではないか。
3. 労働に関心をもつ人と、エコロジーに関心をもつ人は、結びつきが弱い。蝶番として切実なのは衣食住、特に食べもの（見せかけのエコロジーではない思想を求めて）
4. 鶏は摂取したエネルギーを肉に持って行きやすいように品種改良され、ゲージに詰め込まれ、免疫力が落ちているので、その結果インフルエンザにかかりやすくなり、抗生物質が与えられ、抗生物質に耐性をもつもっと強烈なウイルスに突然変異する可能性が出てきている。鳥インフルの変異にどれほど危機感を抱けているか？